

多度神社展

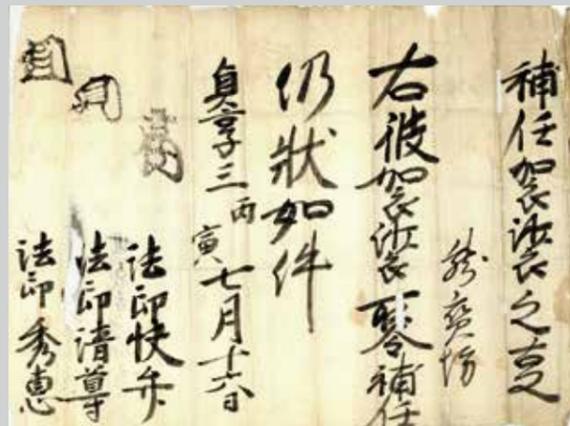
立川流との関連

専右衛門らが建築をどのように学び修得したかは史料で見ることができませんが、信州諏訪の大工・立川和四郎^{たてかわしろう}に影響を受けたという指摘があります。立川和四郎らの建築は立川流とよばれ、素木造りで彫刻がダイナミックであることが特徴です。2代目と四郎は信州のみならず、尾張や近江でも多くの寺社を建築しています。立川一派の大工集団だけでは人手が足りず、その地域の大工も一緒に建築に携わったとされています。多治見周辺では文化10年（1813）に内々神社本殿（春日井市）、文政6年（1823）に深川神社本殿（瀬戸市）、天保8年（1837）には内々神社御舞台（舞を奉納する山車）^{おまいだい}を立川和四郎が手掛けており、これらの建築に専右衛門や作十郎らが関わった可能性は否定できません。

多度神社の社僧

僧侶の身で神社を管理するものを「社僧」といい、多度神社は江戸時代を通じて里山伏とよばれる修験僧の社僧によって守られてきました。多度神社や地域に残る棟札や古文書などから、真言宗醍醐寺を本山とする当山派の山伏が代々管理してきたことがわかっています。長年にわたる修行を経験した山伏は常人にはない力を持つと信じられ、密教僧と同じように祈祷を行い、印を結び真言を唱えました。山伏が行う祈祷は病気平癒や火伏せ、家宅や神社建築の際の地鎮祭などで、地域の人々にとってなくてはならない存在であったと考えられます。

最も古い記録は貞享3年（1686）の伊勢国世義寺からの補任状で、龍宝院、文殊院という2人の山伏がそれぞれ「袈裟」と「錦地」という官位を任せられました。この2年後の元禄元年（1688）には多度神社の別当として龍宝院の名が棟札に見られ、さらに翌年には多度神社末社の日々の灯明と掃除をすることで龍宝院は村から年間4斗の米をもらいうける約定書が取り交わされました。17世紀後半から幕末までの約200年間で延べ10人程の山伏の名が史料で確認でき、同時に複数の山伏が多度神社にいたとも考えられます。中には大越家や阿闍梨という厳しい修行の上で得られる位をもつ山伏もあり、遠方からの弟子入り志願者もあったほどです。



■貞享3年（1686）龍宝院宛補任状（多治見市図書館所蔵）

多度神社の山伏は万延元年（1860）の記録によれば、多度神社以外に下ノ洞荒神社、高田村白山社、妻木村氏神稻荷社を管理しており、多度神社境内には祈祷所と居宅がありました。この他に甘原神明神社の社僧を勤めていたことも棟札からわかります。また、笠原の小宮の湯立て祭を数人の山伏でとりしきっていたことがわかる古文書も残されており、多度神社の山伏が広範囲に神社の管理にあたっていたことがわかります。

【主な参考文献】

- 多治見市 1980『多治見市史』通史編上
- 笠原町 1993『笠原町史その五 かさはらの歴史』
- 鶉 功 1993『図解 社寺建築 各部構造編』
- 田畑みなお・平井聖・伊東龍一・日向進 1994『社寺彫刻—立川流の建築彫刻』
- 麓 和善 2012『多治見市文化財保護センター研究紀要第11号 多治見市有形文化財甘原神明神社保存修理工事報告書』（多治見市教育委員会発行）
- 麓和善・濱田晋一・戸上薫・川端真 2021『多治見市文化財保護センター研究紀要第15号 多治見市有形文化財永泉寺惣門修理工事報告書』（多治見市教育委員会発行）

【謝辞】（敬称略）

多度神社 第9区 第11区 多度神社保存の会 黒田正直 小嶋重行
野呂香津文 森田栄一 池田町屋郷土資料館 永泉寺 大平稻荷神社
奥蔵寺 崇禅寺 高田神社 株式会社田口建築 多治見市図書館郷土資料室
甘原神明神社 土岐市 普賢寺 本土神社

多治見市文化財保護センター企画展パンフレット 「多治見市有形文化財指定記念 多度神社展」

展示期間：令和4年2月14日（月）～6月24日（金）
開催場所：多治見市文化財保護センター展示室
発行：多治見市教育委員会・文化財保護センター
〒507-0071 岐阜県多治見市旭ヶ丘10-6-26
TEL(0572)25-8633 FAX(0572)24-5033
E-mail hogo-cen@city.tajimi.lg.jp
URL <https://www.city.tajimi.lg.jp/bunkazai/>
発行部数：1000部（印刷費用 77,000円）（税抜き）



■多度神社本殿（平和町1丁目123番地）
多治見市有形文化財（建造物） 令和4年1月26日指定
附 棟札42枚 木槌3本 陶製狛犬1点
檜皮葺 一間社流造 天保12年(1841)再建

多度神社本殿、天保12年に再建

多度神社の本殿は天保12年（1841）に再建されたもので、この時の棟梁は池田町屋村の野村専右衛門国信、葺師は尾張国宮辻花の伊藤喜三郎と棟札に記録されています。また、『多度神社沿革誌』には多度神社本殿建築の詳細が書かれた古文書の写しがあり、これによれば大工は野村専右衛門と野村作十郎国筠で、作十郎が補佐役として建築に加わっていたことがわかります。同古文書には、文政11年（1828）から天保12年までの14年の間、氏子が月に8文ずつ出し合って建築代を集めたことも記録されています。総額は伝わっていませんが支払い内訳が書かれており、専右衛門と作十郎に金35両、木挽に金3両、葺師に金6両渡しています。この38年前の享和3年（1803）に専右衛門が請け負った奥蔵寺観音堂（上野町）の建築では、専右衛門が受け取った金額は金12両2分と米4石であることから多度神社の建築代がいかに高額であったかわかります。

本殿の構造

多度神社本殿は東を正面として建ち、身舎は幅約180cm（1間）、奥行約135cmで、向拝（本殿正面に張り出した底部分）が付いた一間社流造です。構造上の特徴は、柱の上に「出組」という外側に張り出した組物が使われていることです。組物とは柱の上などにあって軒を支える構造物で、斗（方形の受木）と肘木（上からの荷重を支える横木）を組み合わせて構成されています。一段目の組物から外側へ肘木を出し斗を並べたものを出組といいます。多度神社本殿ではこの出組が土台の柱の上に使用されており、切目縁（身舎の三方を廻る縁側）を支えています。さらに身舎の柱も出組で丸桁（屋根の垂木を支える桁）と虹梁を支えています。身舎の柱の出組は、最上部の肘木が若葉の形をなしており装飾的な作りになっています。これらの組物によって檜皮で葺かれた大きな屋根を支えられ、荘厳な姿を作り出しています。

また、身舎の両側面には妻飾りがあり、若葉の渦巻き文が彫られた二重虹梁になっています。破風中央には懸魚があり、その両脇には雲が彫られた鰭がついています。

彫刻

向拝水引虹梁は、表側はしぶきをあげた躍動感あふれる波の浮彫で、裏側には渦と若葉が一体化した植物が浮彫されています。その上部の中備えは表側が翼を持つ飛龍が波間を飛翔する様子で、裏側にはうねる荒波が彫られています。飛龍の口内には朱の彩色が施され、目には銅板が嵌め込まれています。

向拝の木鼻は聖域を守護するとされる「象」、海老虹梁の木鼻は「獅子」で、いずれも阿形で口内に朱の彩色、目に銅板が嵌め込まれています。向拝と身舎を繋ぐ海老虹梁は、龍そのものが虹梁の本体をなす形で、北側が昇り龍、南側が降り龍となっています。

これらの彫刻は、野村作十郎国筠が慶応2年（1866）に手がけた廿原神明神社本殿との類似点がみられることから、作十郎が手がけた可能性も考えられます。

向拝水引虹梁と中備え(表)



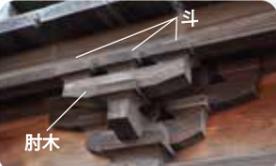
木鼻（獅子と象）



脇障子の竹節欄間



組物（出組）



向拝水引虹梁と中備え(裏)



破風と懸魚および鰭



組物（出組）



木鼻



たばさみ手扶



えびこりょう海老虹梁



棟梁・野村専右衛門国信

棟梁・野村専右衛門国信は池田町屋村出身の大工で、19世紀前半に多くの寺社建築を手がけました。また、池田町屋村の庄屋を務めるなど村政にも尽力した人物です。専右衛門の直系かは不明ですが、同村の野村姓の大工は18世紀前半より史料に見ることができます。その初見は享保14年（1729）で、野村作十郎国信が天満宮社殿（田代町旧駅前弘法堂内）を修復したことが棟札からわかります。18世紀後半には野村磯右衛門郡重、19世紀前半になると野村専右衛門国信が棟梁として活躍しています。専右衛門が手掛けた寺社で記録が残っているものは、奥蔵寺観音堂（本堂）、池田富士白山神社・浅間神社・立山神社（富士見町）、長福寺中門（弁天町）、妻木八幡院観音堂（土岐市）、神留寺庫裡（可児市）、高田鋸明神・高田白山神社（高田町）、多度神社本殿などです。このうち専右衛門の技術を今もみることができるのは多度神社本殿と奥蔵寺本堂の彫刻の一部、妻木八幡院観音堂（土岐市崇禅寺の観音堂として移築）です。天保年間以降は、東濃の宮大工として有名な野村作十郎国筠が数多くの寺社建築を手掛けるようになります。



■陶製狛犬(阿形)
多度神社所蔵

「市ノ倉／加藤三ツ助」
「天保十二年（八月日）」



■木槌 多度神社所蔵
棟上式で使用された

表「天保十二年三月吉日」
裏「大工棟梁池田住野村専右衛門国信」

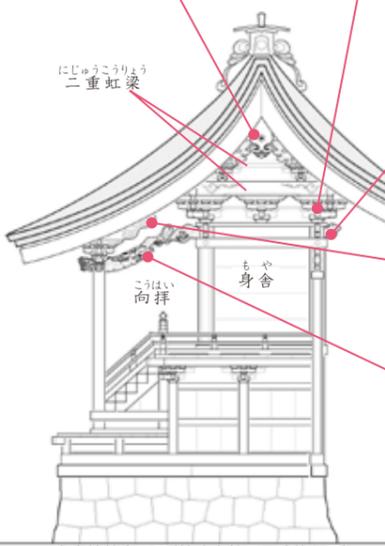
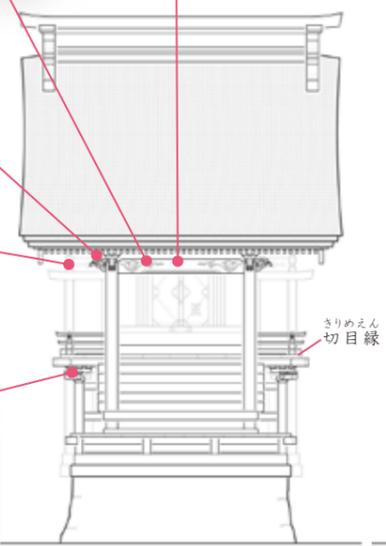


■棟札(天保十二年) 多度神社所蔵

野村作十郎国筠

野村作十郎国筠（1815～1871）は池田町屋村の「白木屋」という材木屋に生まれ、幼少のころから建築や彫刻に興味を持っていたと伝わっています。天保9年（1837）に大森弁才天社塔（可児市）を再建したのが一人立ちして初めての仕事とされます。その後、弘化元年（1844）に虎溪山永保寺の六角堂再建に従事し、文久3年（1863）には永保寺禅堂を手がけました。その技術の高さが永保寺の春応禅師の目にとまり、禅師の推挙によって安政3年（1856）に京都の岩倉殿から従五位上の位を受けました。以降、作十郎は「杓頭」と名乗り、東濃の名匠と呼ばれています。

この他に永泉寺惣門や本堂（池田町）、普賢寺鐘楼門（大原町）、廿原神明神社本殿、内津妙見寺本堂（春日井市）、愚溪寺二重塔（御嵩町）、鵜沼観音寺など多くの建築を手がけ、特に優れた彫刻で後世にその名を伝えています。エネルギーで見ると、この地域では右に出るものはありません。明治4年（1871）に作十郎が亡くなると弟子たちにその技術が継承されていきました。



多度神社立面図(株式会社田口建築作図)